

モネとルドン

Claude Monet and Odilon Redon

モネ没後100年
ルドン没後110年

三菱一号館美術館 小展示 2026 年夏 モネとルドン

会期：2026 年 6 月 13 日（土）～9 月 23 日（水・祝）

主催：三菱一号館美術館

会場：三菱一号館美術館 1 階 小展示室 （東京都千代田区丸の内 2-6-2）

観覧料金：本展の観覧料は企画展「“カフェ”に集う芸術家」に含まれます。

概要

1840 年生まれのクロード・モネは、1874 年の第一回印象派展を機に、印象派の中心的画家として世に知られるようになります。その 5 年後、モネと同年生まれのオディロン・ルドンは、版画集『夢のなかで』（1879）でデビューします。39 歳という遅い出発のために、しばらくの間は無名でしたが、ユイスマンスの小説『さかしま』（1884）で紹介されたことをきっかけに次第に世に知られるようになり、1886 年には第八回の印象派展に参加しています。外界の変化を描いたモネに対して、内面世界を表現したルドンと、差異ばかりが強調されてきた二人の画家ですが、同じ時代に生きた画家として、共通点もみられます。ルドンは印象派展が開催されるよりも早い 1868 年にモネやピサロに言及した批評を残しており、印象派に対して関心を示した初期の批評家の一人に数えられます。モネとルドンはいずれも、カラーをはじめとする前世代の画家から影響を受けながら同じ時代に生き、それぞれに当時最先端の表現を志向していました。

三菱一号館美術館にはルドンとモネの作品が 2 点ずつ寄託されています。モネ没後 100 年、ルドン没後 110 年となる今年、他の画家による三菱一号館美術館の所蔵・寄託作品を加えた計 16 点により、モネとルドンの同時代性に着目した本展を開催します。

小企画展について

2024 年 11 月 23 日（土）の再開館に伴い 1 階に「小展示室」（約 70 m²）を新しく設置し、ここで開催する展覧会を新たに「小企画展」と名付けて運用を始めます。小企画展では、美術館の活動の根幹となる所蔵作品、または寄託作品や貴重書を中心に、学芸員の学術的な興味・関心に基づく企画展示を行います。特定の画家や主題に焦点を当てるもの、季節に寄り添うものなど、ヴァリエティに富む展覧会を年に約 3 回行います。小企画展をきっかけとして、当館の活動が将来的に広がることを目指します。

モネとルドン

Claude Monet and Odilon Redon

モネ没後100年
ルドン没後110年

I モネ、ルドンと印象派 Camille Corot, Odilon Redon and Impressionism

No. 1

1868年、画家と美術批評家の二つの途を同時に探っていた20代の後半のルドンは、サロン（官展）の審査を通過していた旧作の出品を取り下げた。地元ボルドーの日刊紙に、サロン評を執筆するためである。この展評でルドンは、コローとピサロそしてモネに言及している。また1880年の第五回印象派展についての所感を記し、ドガに言及している。ここではルドンの言葉を借りて、モネとルドンと周辺の画家の作品を読み解いていきたい。

No. 2-6

ルドンが記録したコローの言葉に従えば、『夢のなかで』の《表紙＝扉絵》No. 2の樹は確かなもの、後光を背に竖琴を持つ有翼の人物は不確かなものとなる。人の顔をした《沼の花》No. 4は、茎の上から下へと、生物の発生段階を辿るかのように、成熟して開花する。ルドンは、植物学者アルマン・クラヴォーNo. 5-6を通してダーウィンの『種の起源』（1859）を知り、最新の科学の洗礼を受けていたのである。

「不確かなものの傍らには、確かなものを置いてごらん」とコローは私に言った。そして繁った木の葉が、一枚ずつ刻み込まれたかのように描かれているペンのデッサンを見せてくれた。

「毎年同じ場所に行って、同じ木を描くといい」と彼はつけ加えた。

（ルドン『私自身に』）

No. 7-10

1868年、ルドンはピサロのサロン（官展）出品作品について、「全体の印象を、さらに鮮明に保ち続けるために、犠牲を払っている」と評した。ルドンの展評は、印象派を擁護した美術批評家テオドール・デュレの小論『印象派の画家たち』（1878）よりも10年早い。ルドンは、印象派の画家に言及したごく初期の論者のひとりである。

No. 11-12

ドガは、1855 年にアカデミズムの巨匠アングルから受けたアドヴァイスに従い、素描の修練を重ねる。イタリア滞在中には、アングルの創作の源となったラファエロの自画像の部分を模写した No. 11。セザンヌとは反りが合わなかったとも言われるが、ともにドラクロワに対しては敬意を抱いていた。ルドンもドラクロワの熱心な崇拝者であり、多くの模写を残している。またドガとルドンはともに、「進化論」に関心を抱いていた。

II モネとルドン Claude Monet and Odilon Redon

No. 13-14

1860 年代のモネは、大画面に風景あるいは風俗の主題を、筆跡を残して描いてサロンの審査に提出し、しばしば落とされた。ルドンは、1868 年のサロンに展示されたモネの海景画について主題、技法と作品サイズのバランスを欠く、と指摘している。モネの最初の個展は 1880 年、『近代生活（ラ・ヴィ・モデルヌ）』誌を刊行していた出版業者シャルパンティエの編集室の一角を会場とした。翌年にはルドンの初個展が、同じ会場で開催されている。

No. 15-16

ルドンは最後の印象派展に、木炭と版画による「黒（ノワール）」の作品を出品した。一例が《沼の花》No. 4 である。だが小型の風景の習作では、印象派の明るい色彩を早い時期から採り入れていた。また 1894 年の個展以降に公表した色彩の作品では、対象の固有色とは関係なく自由に色を選び、筆跡を残しながら彩色している No. 15。ルドンは、外界の描写に拘泥したモネをはじめ印象派に対して批判的だったが、印象派の表現を習得しており、特に色彩表現は多くを印象派に負っている

大きな感動を受けたのは、サン＝スラン教会の円天井（ヴォールト）の下で行われた、私の初聖体拝領（コムニオン）の時です。合唱が私を感動させたのです。家庭ではいい音楽を多く聞いていましたが、この合唱こそ、私が最初に受けた芸術の啓示でした。

（ルドン『私自身に』）